一般
寄稿

経営学科

軽音楽系サークル顧問としての20年

今林 正明 Masaaki IMABAYASHI
経営学部経営学科教授

1 プロローグ

みなさんは「軽音楽部」と聞いてどう感じるだろうか？

地下のスタジオからは、エレクトリックベースや足で蹴りつけるバスドラムが奏でる重低音が、ドコドコボコボコと床を震えさせる。また、授業に大きなギターケースを背負ってくる学生はいつもその置き場所を探している。いずれにせよ、「軽音楽部」に良い印象を持っていない大学教員も少なくないのでは、と推察する。ファッション・髪型などにおいて特徴の多い学生も多いためか、一般の学生以上に、学業が好きでない者、出席等に問題がある者が目立ってしまうことも事実である。

音楽系サークルそのような学生達に「部活の顧問」として接しはじめて、目白大学で15年、前任校を含めると20年の月日が経過した。

部活の顧問ないし指導者が注目を集めるのは、体育系クラブはもとより文化系クラブにおいても、競技会で好成績あげた場合、仮に競技会の無い分野であっても外部団体から表彰を受ける場合であろう。しかし、私が関わってきた軽音楽系サークルは、競技会にも表彰式にもまったく無縁な世界である。

ロックミュージックが50年におよぶもっとも長い付き合いの友人である。私が、どのように軽音楽部をはじめとする音楽系サークルと、20年間にわたってかかわって来たのかについて述べていきたい。

2 軽音系サークル学生気質

女子高の軽音楽部を舞台にした4コマ漫画の「けいおん！」（かきふらい著，芳文者）がスタートしたのが2007年。さらに、TBSでアニメとして放送されたのが2009年。漫画ならびにアニメによって、軽音楽部に対する見方も変わり、また、このアニメをリアルタイムに見た世代からは軽音系サークルにおける女子の比率があきらかに向上していると感じている。しかし、以下に述べる学生気質は「けいおん！」前後で変わってはいない。

これまで自分の出身大学も含め3つの大学で軽音楽系サークルを見てきたが、1年最初に入部した学生数に対し、4年最後の「卒業ライブ」に出演する学生数は、5人から10人に1人程度に減っているのが通例である。1日に利用できるスタジオの時間的制約、楽器演奏の技量、人間関係の巧拙、何より自分が演奏したいジャンルを共有できる仲間と出会えるか、などの要素から自然に部員数は淘汰されていく。

軽音系サークルで活動するという事は、ギターの一人弾き語りという例外もあるものの、基本的にバンドを組むということである。しかも、ギター・キーボードそしてボーカルは複数人が1つのバンドにいても良いが、ドラムとベースは基本的に一人ずつとなっている。その制約の中で、学年が進むにつれ、「問題児」が成長し、部活全体のまとめ役になっていくこともある。入学してすぐにリーダーシップを発揮する学生もいる。演奏技量が抜群で、かつ、憎まれない性格だと、どんなに練習をサボっても、次々と新しいバンドに誘われるという学生もいる。この不思議な関係を客観的に観察することは大変に興味深い。

軽音楽系サークルの学生達に対して、良く言われる言葉。それは「自己満足」の世界。憧れるバンドやミュージシャンの曲を、照明を浴び、PA（パブリックアドレス：音響設備）を通して演奏している、いや、その「つもり」になっているという満足感。部活の中で、「あいつは上手いね」といわれる満足感。しかし、「軽音楽系サークル以外の学生達から憧れられる人気者になりたい！」という意識は、意外なほど少ない。私が関わってきたどの大学の軽音部においても、一般学生に対するライブの告知をすることには、ほとんど興味が無い。そのことをもってしてもやはり「自己満足」の世界なのである。

では、彼ら彼女らが感じる部活の意義は何であろうか。彼ら彼女らは、役割分担（担当楽器）を決めて、複数の人間と協力し（バンドを組み）、目標（一つの楽曲を表現する）を達成するということを、4年間の間に、何度も何度も繰り返す。ある時、一人の学生が4年間に演奏したすべての曲の譜面を持って来たが、その厚さは10㎝を超えていた。その繰り返し中で、同じ楽器を演奏する者同士は、相手に対して自分の技量が勝っているのか劣っているのかということをかなり正確に把握している。技量を上げるのか、「バンドを組もう」と誰にも言われなくなり部活を去るのか、ごく少ない例外として、「演奏をしない人気者」として部に残るのか。この3つをライブの節目ごとに考え続けつつ4年間。この繰り返しこそが軽音楽系サークルをつづけることの意義であると私は考える。

3 目白大学新宿キャンパスにおける軽音系サークルとの出会い

私が目白大学経営学部に着任したのは2002年4月。本学新宿キャンパスは、経営学部がスタートしたことのみならず、2年前の2000年にスタートした四年制の3学科（心理カウンセリング、メディア表現、社会情報）は女子大から共学へと変わり、大きく舵を切った。

目白大学に着任3日前のできごとである。本学の定例行事である1年生泊まりがけのフレッシュマンセミナー事前ミーティング。新入生をリードしていく先輩学生達（リーダー学生）とのミーティングにおいて、私は、着任予定の教員として、あと3日だけ所属している短大（東京理科大諏訪短大（当時））で軽音楽部の顧問をしていると自己紹介をした。すると学生課の職員だったOさんがリーダ学生としてミーティングに参加していた軽音楽部の部長・副部長の学生を紹介してくださり、すぐにその学生達と学内スタジオでセッションを行なった。そ

の当時、四年制大学としてはまだ開学２年目の新宿キャンパスにおいては、軽音楽部ができたものの初心者ばかり。さらに一時３人にまで部員が減るという廃部の危機を、Ｏさんの助言でどうにか乗り越えたところだったのだ。その日の夜、信州諏訪に帰る特急「あずさ」の中で、着任前なのに目白大学に愛校心が芽生えている自分が不思議であった。

結局、本学では、軽音楽部、ボサノバ研究会（12年間続くも2014年に廃部）、そして音楽研究会の順に３つの軽音楽系サークルの顧問を引き受けた。

4 私とロックミュージック

私とロックミュージックの出会いは小学校３年(1966年)にさかのぼる。当時の大人達は、ビートルズをはじめとするロックに拒否反応を示す者も少なくなかった。しかし、私の両親は、洋楽ベストテン番組の先駆けである「ビートポップス（フジテレビ）」に、毎週土曜午後３時、なにげなくチャンネルを合わせていた。そこで流れていた当時のヒット曲を私は好きになり、ヘルプという言葉が「助けて」という意味であることもビートルズから学んだ。

中学・高校は70年代のハードロック・プログレッシブロックの全盛期。LPレコードは当時でも１枚2,000円。高く手が出ないため、FMラジオ番組をカセットテープに録音しては消すことを繰り返した。情報源はFMラジオと数種類のロックミュージックの雑誌のみ。その中で、エリック・クラプトンやキース・エマーソンとの出会いは私に重要な影響を与えた。私はギターを手にはしたものの、自分は演奏者にはなれないとの思い込みが強く、あくまでリスナーを極める気持ちで毎月出る洋楽の新譜を心待ちにする日々を送っていた。

5 学生達を見る目

私は、学生が言葉に出した希望は強いものだと考えている。前任校では、短期大学という部活が継続しにくい環境のせいか、軽音楽部は出来ては廃部を繰り返していた。安定的に続く軽音楽部の顧問になるまで私は、着任から７年もかかった。「私はロック好きである」というサインは出していたものの、学生から「軽音楽部の顧問になってください」という言葉を待っていたからである。

学生達の演奏について、評論・批判はしない。ただ、良かった時には「良かったよ」と言う。私が演奏について口出しをするのは、何をやってよいのかわからない初心者組か、逆に、高校時代からバンド慣れしていて「校内のスター」だった組に対してのみである。また、私自身の音楽に関する好みの押し付けだけは絶対に行わないようにしている。

学生達に対して言う事は、2つだけ。1つめは、「チューニング（調弦）を合わせろ」ということ。チューニングの揃っていない初心者バンドには、一度、そのままの状態で一曲を通し演奏させ、私が全ての楽器のチューニングを直し、同じ曲を演奏させる。２度目の演奏が終わった瞬間、全員が「さっきと同じ演奏？」と驚きの顔つきになる。２つ目は「グルーヴを合わせろ」。適当な訳語は無いが、強いて言えば「リズムのノリ」である。ここがロックの一番難しいところだが「リズムを合わせる」ことと「グルーヴを合わせる」ことは、似て非なるもの。メトロノームに合わせるのが前者、音楽に合わせて、その場にいる人の体が、自然かつ同じ「ノリ」で揺れだすのがグルーヴだろうか。チューニングとグルーヴさえ合っていれば、指など早く動かなくとも、「いい演奏だね」と言ってもらえるのがロックである。

ちなみに、私がもっとも好きな瞬間は、ライブ後の「片付け」の時に、彼ら彼女らの表情を見ることである。演奏した学生、しなかった学生に関わらず、部員達は、疲れながらも穏やか、かつ、満足した表情で、指示待ちをすることもなく、あっという間に「ライブハウス」だった空間を、いつもの学生食堂へと変身させる。

6 エピローグ

2015年10月。池袋のライブハウス。本学「音楽研究会」の創部10周年ライブに、ゲストとして一曲だけ一緒に演奏して欲しいとの依頼を受け、快諾した。演奏終了後、30代を迎えた卒業生達、数十人から大きな拍手をもらった。その場にいた誰よりも、私自身にとっては大きな意味のあるイベントだった。

軽音楽系サークルの学生達が卒業し、親になった時、子どもたちに自らの部活の思い出を、にこやかな表情で語ってくれれば、それが私の最大の喜びである。